
冬の朝

本上 ひろと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬の朝

【Nコード】

N3364A

【作者名】

本上 ひろと

【あらすじ】

誰もが体験する冬の朝を、一人の少年の視点で描いた短編小説

目が覚めると、僕は布団の温もりの中にいるんだ。そのあったかい所から一歩でも外に出ようものなら、一気にロシアの気候のような、もちろん僕はロシアなんて行ったことはないけど、そんな寒さに襲われることはわかってる。もう12月なんだから。僕は肩にグツと力が入るのを感じた。上の歯と下の歯が急いで何度もぶつかり合って、足は左右に細かく行ったり来たりしている。まるで僕の身体じゃないみたいなんだ。そんな冬の奴のいたずらが、僕は大好きだった。

僕のお母さんが忠告するように、周りの友達がみんなそうしてるように、洋服を何枚も重ね着するなんてことは、僕は嫌いだ。もちろん外に出れば、また冬の奴が僕に向かって風を吹いて、僕をブルブル震えさせるのを楽しむのは分かっているけど、僕自身その感覚が楽しくってたまらないんだ。

今日だって、朝のお日様が僕の部屋の窓に見えるところに起きて、いつもの青い自転車で行く。青い自転車は僕のお気に入りだった。家から最初の100メートルは思いつきりこいだ。そうすると、冬の奴は、もう参ったよって感じで僕に降参して、冷たい風を吹くのをやめてくれるんだ。もうすぐいつもの小さな橋が見えてくる。街の中の小さな川なのに、何十羽ものカモたちの姿を見ることが出来た。カモたちは、いつも僕に向かって、冬の寒さなんてへっちゃらさって言うように、水の中でせつせと働く自分たちの姿を見せるんだ。僕は心の中で、カモに挨拶するんだ。いつも何気ないことをカモと話すんだ。まあ、今日はいつもより冬の奴がいじわるだねとか、今年の春はどこに旅行に行くんだいとか、そんな話をさ。

そして僕はさらに強く自転車をこぎ出すんだ。だって、そうしないと、また冬の奴が、冷たい風を吹き始めるんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3364a/>

冬の朝

2010年10月18日09時15分発行